様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 19 日現在

機関番号：22401
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2010～2012
課題番号：22592493
研究課題名（和文）0 歳児を持つ母親の子育て支援システムの充実を目的とした祖父母教育プログラムの検討
研究課題名（英文）Examination of an educational program for grandparents aiming at the substantial aid-for-childcare system for mothers with babies less than 12 months old
研究代表者
橋本　美幸（HASHIMOTO　MIYUKI）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部看護学科・講師
研究者番号：70513183

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、母親が期待する支援と祖母が行う支援のギャップを少なくし、満足感の高い支援の授受を実現するための祖父母への教育プログラムを検討することである。まず、産後 4 か月までの母親と祖母の支援の授受について実態調査を行った。調査内容は母親へは受けた支援と期待する支援について、祖母へは実際に行った支援とそれに対する満足感についてである。産後 4 か月頃まで祖母は母親(娘)へ家事、情緒支援、子育て情報の提供など様々な支援を行っていたが､自分が行った支援に対しての祖母の満足感は低くかった。一方、母親においては、期待したとおりの支援が祖母から受けられておらず、特に子育て情報の提供、情緒支援に対する満足感が低かった。さらに、母親と祖母(娘・息子の妻)が満足のいく支援の授受ができなかった理由について調査を行った。母親は受けた支援を子育て情報として認識していたが、祖母はそれを情緒支援と認識し、支援していたことが示唆された。この支援に対する両者の認識の仕方の違いが、不満足感を生じさせる要因の１つと考えられた。これらの結果から、支援に対する認識の仕方や役割意識が、母親と祖母で異なっている可能性が示唆された。より満足感の高い支援の授受を行うためには、両者それぞれが互いに支援に対する認識や役割意識を理解し合うことが必要と考えられる。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to examine an educational program for grandparents that aims at nurturing the ability to coordinate between the support that a mother expects and the support that a grandmother would like to offer, and how to effectively offer and receive that support with mutual satisfaction.

First, a survey was performed to investigate the types of support that were offered by grandmothers (birth mothers) to mothers within 4 months after the baby’s delivery. Questionnaires to mothers concerned the support they received from the grandmothers, while those to grandmothers concerned the support they actually offered to mothers, and to what extent each was satisfied with the offer. Grandmothers offered various types of support such as housekeeping, mental support, and child-rearing information to mothers until approximately 4 months after the delivery. However, grandmothers were not necessarily satisfied with their offers of support. In addition, mothers were not satisfied with the support they received, because they did not receive the types of support that they had expected, especially in terms of child-rearing information.

In the next survey, we examined the reasons both grandmothers (birth mothers and mothers-in-law) and mothers were not satisfied with the support the grandmothers offered. We found that while mothers recognized the support offered as child-rearing information, grandmothers considered this type of support to be mental support. This discrepancy between the recognition of the support offered between grandmothers and mothers was considered a factor that influences the feeling of dissatisfaction in both grandmothers

and mothers.
These results suggest that recognition and role consciousness for support differs between grandmothers and mothers. In order to deliver and receive effective support that satisfies both grandmothers and mothers, mutual understanding of the recognition and role consciousness for each type of support is necessary.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
2012 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：医歯薬学
科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学
キーワード：子育て支援、祖父母、新生児・乳児、子育て、支援者、育児不安

１．研究開始当初の背景

母親が医療専門職による新生児・乳児全戸訪問を希望しない理由の１つとして、家族－実母や姉妹－の支援があることを挙げている。多くの祖父母が何らかの形で孫への支援を行っている実態も報告されていることからも、母親は身近にいる家族に支援者としての役割を期待していると考えられる。子育ては家庭で行なわれるため、母親が望む時に望む量の支援を医療専門職が提供することは難しい。また、子育て中の母親に必要とされているソーシャル・サポート(情緒的、物理的、情報的、評価・類似的) (Crounenwett, 1985)の全てを、医療専門職が提供できるわけではない。すなわち、医療専門職対母親を主軸とした指導や支援システムでは、母親のニーズを十分に満たすような子育て支援システムを整えるのは難しいと思われる。しかしながらその一方で、祖父母が子育ての支援を行うことで、母親と祖母の双方から「昔と今の育児方法や子育ての考え方が違う」などの戸惑いの言葉が聞かれている。祖父母世代と今の支援のシステムが異なっており、母親が期待する支援と祖父母が行う支援の内容が一致していない可能性は高い。そのため両者ともに満足感が低かったり、ストレスが生じているのであろう。そこで、母親を支援したい、孫の育児に参加したいと望む祖父母を重要な子育て支援者として再認識し、祖父母による子育て支援を充実させることに焦点を当てた支援システムを構築するための実証研究を推し進める。

２．研究の目的

本研究の目的は、母親が期待する支援と祖母が行う支援のギャップを少なくし、満足感の高い支援の授受を実現するための祖父母への教育プログラムを検討することである。

３．研究の方法

(1) 研究１

この調査の目的は、産後４か月頃までの母親と祖母の支援の授受の実態と母親の支援へのニーズについて明らかにすることである。対象は政令指定都市に居住する６歳未満の子どもを持つ母親と祖母(実母)ペア 370 組とし、郵送法による無記名の自記式質問紙調査を実施した。調査内容①は、母親が産後に祖母(実母)から受けた支援と期待する支援、祖母(実母)へは母親に行った支援としてあげたかった支援についてである。支援項目として 33 項目を挙げ、母親は８段階評定、祖母(実母)は ５段階評定で聞いた。調査内容②は、母親と祖母(実母)の子育て観と育児に対する考え方の相違の有無とその内容についてである。子育て観は文章完成法を用い、「私にとって子育ては」の刺激語で調査し、主な反応をそれぞれ抽出してグルーピングし、さらにカテゴリー化した。

(2) 研究２

この調査の目的は、母親と祖母間で満足のいく支援の授受ができなかった理由を明らかにすることである。首都圏にある４市の乳児４か月健診に来た母親 1523 人と実母・義母(以下、祖母とする)1235 人を対象に、郵送

法による無記名の自記式質問紙調査を行った。調査内容は、「見守り」、「サポートを与える」、「サポートを求める」の3因子からなるサポートに焦点を当てた親子関係尺度(久和ら2006)、産後4か月迄に母親と祖母間で授受された支援(26項目)、祖父母への期待支援とした。祖父母への期待支援は、母親へは子どもが12か月頃までに祖父母に期待する支援役割、祖母へは孫が12か月頃までに祖父母に期待される支援役割19項目について6段階評定で聞いた。母親と祖母は同じ調査内容とした。母親、祖母別に因子分析(主因子法・Promax回転)を行い、両者の因子を比較した。

４．研究成果

(1)研究1

回答に不備のなかった母親 98 名（回収率26.5%）、祖母(実母)53名（回収率14.3%）を分析対象にした。対象者の平均年齢(SD)は、初産の母親 34.5(3.5)歳、経産の母親35.3(3.2)歳、祖母(実母)62.4(6.1)歳であった。子どもの平均年齢(SD)は、初産1.6(1.2)歳、経産 3.7(1.4)歳であった。産後 4 か月の間に祖母(実母)から支援を受けた母親は87名(88.8%)で、そのうち里帰りで支援を受けたのは 52 名(59.1%)だった。また、その支援に対して満足・ほぼ満足と答えたのは78名(89.6%)だった。祖母(実母)への調査では、孫が生後4か月頃までに母親に支援をしたのは 50 名(94.3%)で、そのうち母親が里帰りしていたのは37名(74.0%)だった。

調査内容①の結果、母親が受けた支援と期待した支援については、初産の母親は実質支援(家事全般への支援)、情報支援(子育て知識・方法についての情報提供)への期待が高く、経産の母親は実質支援への期待が高かった(表 1)。初経の母親共に受けた支援と期待した支援の全てに有意差があり、期待とおりの支援を受けられていなかった。特に、経産の母親では、受けていた支援量が少なかった。

表1 母親が期待した支援と受けた支援

	支援の種類	期待する支援	受けた支援	t検定
初産 n=71	実質	5.1(1.2)	4.1(1.7)	*
	情緒	4.2(1.2)	3.5(1.7)	**
	情報	5.1(1.3)	3.4(1.5)	**
経産 n=27	実質	5.0(1.7)	2.7(1.5)	**
	情緒	3.8(1.6)	1.9(1.7)	**
	情報	3.6(1.7)	2.3(1.5)	**

平均(SD) 対応のあるt検定 *:p<0.05 ,**:p<0.01

8段階評定で、点数が高いほど支援を希望していた・受けていたことを示す。

母親が誰にどのような支援を期待するのかについては、初経の母親ともに実質支援と情緒支援を夫や祖母(実母)に、情報支援を看護職と医師に期待していた。

次に、祖母(実母)が母親に行った支援としてあげたかった支援については、実質支援、情報支援、情緒支援の全てに、行った支援としてあげたかった支援の間で有意差があった。特に、情緒支援と情報支援では、その差が大きかった(表 2)。

表2 祖母が行った支援としてあげたかった支援

n=53	してあげたかった支援	おこなった支援	t検定
実質	4.0(0.7)	3.7(1.0)	**
情緒	3.9(0.9)	3.4(0.9)	**
情報	3.4(1.0)	2.9(1.1)	**

対応のあるt検定 **:p<0.01

5段階評定で、点数の高い方が支援の頻度が高い・してあげたかった支援を示す。

調査内容②の結果、文章完成法で記述された文章をカテゴリー化し、＜肯定的反応＞、＜否定的反応＞、＜両価的反応＞、＜中性的反応または分類不能＞に分類した。母親では＜肯定的反応＞を示したのは 74 名(75.5%)だったのに比べて、祖母(実母)では 23 名(43.4%)と少なかった。また、母親では、＜否定的反応＞が 10 名(10.2%)であるのに対し、祖母(実母)では 16 名(30.2%)と多く、有意に異なっていた（$p<0.01$）。育児に対する考え方の相違を認識した母親は 32 名(32.7%、うち初産の母親26名、経産の母親6名)、祖母(実母)は12名(22.6%)だった。相違の調整ができなかった母親は、祖母(実母)から支援を受けることがストレスになるため支援を断ったり、予定よりも早く実家から自宅へ戻るという対処をとっていたことが、記述から明らかになった。相違を感じた内容は、母親では「授乳方法や水分補給」、「抱っこ」、「あやし方」、「沐浴方法」、「衣服」、「育児方針全般」、「出産や育児の意味づけ」、祖母では「授乳方法」、「寝かせ方」、「おんぶ」、「外出方法」、「病気への対処」、「乳幼児教育」、「育児のゆとりのなさ」、「夫婦中心の生活」 であった。

以上の結果、祖母(実母)から受けた支援については、母親の約9割が総体的にほぼ満足と答えていた。しかしながらその一方、母親が受けた支援と期待する支援に差があったこと、母親の3割が祖母の育児に関する考え方との相違の調整ができていなかったことから、期待とおりの支援を受けられていなかった母親の存在を確認できた。祖母(実母)で

も、行った支援に対する満足感は低かった。

母親と祖母(実母)の両者で、支援の授受に関しての不満足感があり、とりわけ情緒支援と情報支援で差が大きかった。情報支援については、母親と祖母の世代間で一般的に考え方が変化した育児知識や方法(母乳育児や授乳方法、添い寝等)で満足感が低かった。これについては、祖母が、母親が学ぶ育児知識や方法を学べる機会を増やし、世代間での育児知識や方法のギャップを少なくすることが必要と思われる。情緒支援に関しては、母親と祖母の「支援を受けたい/支援してあげたい」という思いは一致しているのに、満足する支援の授受ができていなかった理由や母親にストレスが生じていた理由について明らかにすることが、課題として挙げられた。

(2) 研究2

分析対象は母親720人(回収率47.3%)と祖母 409 人(33.1%)であった。対象者の平均年齢(SD)は母親 32.4(4.7)歳、祖母 60.6(5.8)歳、子どもの平均人数(SD)は母親 1.6(0.8)人、祖母2.4(0.9)人であった。親子関係尺度の因子分析の結果、母親は「サポートを求める(4項目)」、「サポートを与える(4項目)」、「見守り(5項目)」(累積寄与率57.6%、α係数0.85～0.72)、祖母は「見守り(5項目)」、「サポートを求める(3 項目)」、「サポートを与える(5項目)」(累積寄与率51.4%、α係数0.77～0.64)と、それぞれ3因子が抽出された。因子を構成する項目は3因子共に、母親と祖母でほぼ同じであったが、各因子間の相関係数は r=－0.06～0.04 と相関関係はなかった。因子得点は、「見守り」と「サポートを与える」では祖母の方、「サポートを求める」では母親の方が有意に(Mann-Whitney U,p＜.00)、高かった。以上のことから支援に対する姿勢が、母親と祖母間で違っている可能性が示唆された。

母親と祖母間で授受された支援 26 項目の因子分析では、母親は「情報(9 項目)」、「母親の休息(7項目)」、「情緒(9項目)」(累積寄与率66.7%、α係数0.91～0.90)、祖母は「情緒(12項目)」、「情報(6項目)」、「母親の休息(7 項目)」(累積寄与率66.5%、α係数0.94～0.91)の各 3 因子が抽出された。因子を構成する項目は、「母親の休息」では両者で同じであったが、「情報」と「情緒」では異なっていた。母親が子育て情報として期待していた支援を、祖母はそれを情緒支援と認識し、支援していたことが示唆され、両者の支援に対する認識の仕方が異なっていると考えられた。

祖父母への期待支援(19 項目)の因子分析では、母親は「子育て知識と文化の伝承(6項目)」、「労働力としてのサポート(6 項目)」、「情緒･相談役(5項目)」(累積寄与率58.9%、α係数0.89～0.79)、祖母では「子育て知識・文化の伝承(10項目)」、「労働力としてのサポート(5項目)」、「情緒・相談役(4項目)」(累積寄与率59.1%、α係数0.90～0.75)のそれぞれ 3 因子が抽出された。「子育て知識と文化の伝承」は、伝統行事や子育てに関する知識、子どもとの遊び方やあやし方、病気の時の対処など祖母が経験から得た有用な子育て情報支援を意味する。「労働力としてのサポート」は、子供の面倒や遊び相手、自分(母親)が忙しい時や体調不良時の家事全般の支援を意味する。「情緒・相談役」は、子育ての悩みや大変さへの共感や受容を意味する。

母親と祖母で違っていたのは、夫婦の役割分担、働きながらの子育てや2人以上の子育てなどへの支援が、祖母では「子育て知識・文化の伝承」に含まれていたが、母親では「情緒・相談役」に含まれていた。祖母は経験から得たこれらに関する知識や情報を、子育て情報支援として認識していると考えられるが、母親は違っていた。また、子ども/孫のしつけや経済的支援は、母親では因子負荷量が少なく、分析から除外された項目であるが、祖母ではしつけは「子育て知識・文化の伝承」、経済的支援は「労働力としてのサポート」に含まれていた。母親は子どものしつけについては祖母に支援を期待していないが、祖母は自分の支援であると認識していたと考えられる。次に、母親と祖母の3つの因子の得点をそれぞれ平均化し、両者の因子の差を求めた(得点が高いほど支援に肯定的であることを示す)。「子育て知識と文化の伝承」得点は母親4.1(1.0)、祖母4.1(0.9)、「労働力としてのサポート」得点は母親 4.5(0.9)、祖母4.6(0.8)、「情緒・相談役」得点は母親3.8(1.2)、祖母5.0(0.7) (Mann-Whitney U, p＜.00)であった。「子育て知識と文化の伝承」、「労働力としてのサポート」の支援についての認識は、母親と祖母で一致していた。しかし、支援内容についての認識に相違があるため、支援の授受に当たっては、特に「子育て知識と文化の伝承」については、お互いの支援への認識の仕方についての理解を深めることが重要である。「情緒・相談役」については、祖母の方が強く支援に肯定的であり自分の役割と思っていたが、母親は産後1年という長い期間の支援としては、祖母にあまり期待していないことが明らかになった。

母親と祖母では支援に対する姿勢や認識

の仕方が違っており、これが双方にストレスや不満足感を生じさせる要因の１つと考えられた。家事全般や労働力としてのサポートは、母親と祖母で認識の相違は少ないが、情緒支援や情報支援に関しては、それぞれの認識の仕方が違うことが示唆された。

2 つの研究結果から、満足感の高い支援の授受を実現するための祖父母への教育プログラム案として以下のことを挙げた。

① 母親と祖母では、支援に対する姿勢や認識の仕方に違いがあることを知り、両者それぞれが互いに支援に対する姿勢や認識の仕方を理解し合える。

② 母親が学ぶ育児知識や方法－特に母親と祖母の世代間で変化が大きかった知識・方法－について、祖母が学べる機会を増やす。この場合、産後早期のものだけではなく、新生児から乳児期など長い期間の知識や方法についてのアドバイス(例：抱っこ、あやし方、寝かせ方、おんぶの仕方、外出方法、病気への対処、等)をする。

③ 経産の母親への支援の必要性を理解する。

④ 母親の支援ニーズについて理解する。

今後の課題は、このプログラム案を実践し、その評価を行うことである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

① Yoko Emori、Miyuki Hashimoto、Kayuri Furuya、Fumie Murai、Home-visit Program for Mothers During Child-Raising:Comparing Mothers Who Did Not Receive Home-visit Services、General Medecine、査読有、Vol.12、No.2、2011、pp.61－68、https://www.jstage.jst.go.jp/browse/general/12/0/_contents

〔学会発表〕（計５件）

① 橋本美幸、那須野順子、芝本美紀、高橋紀子、新生児訪問・乳児家庭全戸訪問事業の訪問スタッフに必要とされるスキルについての調査、日本母性衛生学会総会、2012 年 11 月 17 日、福岡市

② 橋本美幸、那須野順子、足立区のこんにちは赤ちゃん訪問事業における指導効果の評価、日本公衆衛生学会、2011 年 10 月 19 日、秋田市

③ 坂上明子、橋本美幸、那須野順子、生後４か月までの母親と祖母の育児に対する考え方の相違、日本母性衛生学会総会、2011 年 9 月 29 日、京都

④ 橋本美幸、坂上明子、那須野順子、産後 4 か月までの祖母からの育児支援－祖母の希望と実際の相違－、日本看護科学学会、2010 年 12 月 4 日、札幌市

⑤ 橋本美幸、坂上明子、那須野順子、産後 4 か月までの母親への育児支援の実際と希望の相違、日本母性衛生学会総会、2010 年 11 月 6 日、金沢市

６．研究組織

(1)研究代表者

橋本　美幸（HASHIMOTO MIYUKI）
埼玉県立大学・保健医療福祉学部・講師
研究者番号：70513183

(2)研究分担者

坂上　明子（SAKAJO AKIKO）
千葉大学・看護学研究科・准教授
研究者番号：80266626